



自国の民族衣装で行われた初めての夕食会(前列左から2番目が筆者)

として、受動的なメディアとの接触がないこともあげられる。一般的には、人はテレビのニュースを見ることで最新の情勢を知り、世論を知るだろう。しかし、香港カレッジには二〇〇人の全校生徒のためにテレビは一つしかなく、見ている人はほとんどいない。つまり、学生は自身が欲しい情報はおのおの取捨選択し、取りに行かなくてはいけない。折しも、私が留学していた時は、イラク戦争真っただなかで、カレッジ内でも連日議論が繰り

返されたが、特定のメディアの影響を受けな
いため、そこには土台となる特定の解釈がな
く、高校生の自由な想像力と考えるものに意
見が交わされていた。

👉 よりどころのない アイデンティティ

一方で、そこまで自由だからこそ、自身の
アイデンティティを確立することにはとて
も苦悩した。入学後すぐ、日本人であるとい
うこと以外に、自分を表現するものが私には
ないと感じ、それまでいかに「高校生部」
といった肩書きに頼っていたかに気づかされ
た。飛び込んだところが真っ白の更地なら、
自分自身もまた、全くの素の状態にさらされ
るのだ。在学中に「誰もが神様からの贈り物
をもらっている」というカナダの先住民の言
い伝えがあると聞いたが、カレッジでの生活
は、まさにその贈り物に感動する毎日だった。
学生一人ひとりかけがえのない才能があり、
「この人に出会えてよかった」という思いを
全員が抱かせてくれる環境だった。

👉 世界をより身近に

こうしたUWCでの二年間を通じて私が最
も強く感じたこと、それはさまざまな価値観

に触れ、世界を知り、異なる世界に興味を持
つことは、人の想像力を豊かに、そして自由
にするということである。その点、日本では
なかなか外部への興味を喚起しづらい社会環
境であると感じている。そうしたなかで、一
人でも多くの方に異なる世界に興味を広げて
もらえるきっかけを提供できたらとの思いか
ら、学生時代は買い物という身近な行為から
世界の現状を伝えるべく、フェアトレードの
認知度拡大のための活動に取り組んだ。その
後、就職の際には、世界のなかでも特にアジ
アに日本を伝え、日本にアジアを伝えたいと
の思いから、資生堂への入社を決めた。現在
は幸いにも念願が叶い、アジア向けに資生堂
ブランドを導出する業務にかかわっており、
あらためて世界の多様性を突きつけられる毎
日である。今後もUWC在学中に体に染み込
ませた貴重な経験を最大限活かしながら、私
もいつか「この人に出会えてよかった」と思
ってもらえるような人となれるよう精進して
いきたい。

最後になるが、このような貴重な機会をい
ただいたUWC日本協会ならびに会員企業の
皆様には、あらためて深く御礼を申しあげた
い。

世界のユートピアを現実に

資生堂アジアパシフィック営業部 菅沼珠世

すがぬま たまよ

二〇〇二—二〇〇四年UWC香港カレッジ留学。一橋大学法学部国際政治学科卒業後、二〇〇九年資生堂入社。名古屋および岐阜にて国内営業に従事した後、二〇一三年より現職。



3Sが詰まった700日

“Sleep, Study, Socialize” 日本を旅立つ前、UWC卒業生の一人から、UWCでの生活はこの3Sをやり切ることだと教えていただいたことが、今でもとても印象的で、記憶に残っている。まさにそのとおりなのである。UWCでの二年間は私にとって人生のなかで最も遊び、最も多くの人と話をし、最も勉強した二年間であり、それを超える経験はいまだにできていない。

「お邪魔します」ではない世界へ

UWCでの生活がなぜそんなに濃密なもの

になり得るのか、それはUWCという特異な空間形成にあると私は感じている。一般的な留学プログラムとの最大の違いは、「UWCに行く」どこかの国や学校へお邪魔します」という体験ではないことだ。そこには特定の文化やそこに暮らす人たちの暗黙の認識の上に求められる価値観の共有などはなく、毎年九月、新入生が入るたびにその土地は真っさらにならされ、世界中から集った何百通りもの価値観を持った高校生が、新しいコミュニティをつくり上げるのだ。

周りと同じであることを最善とし、世間体に進ずることを無意識のうちに求めていた日本の女子高生にとって、これほど自由で楽し

● ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会

UWCは、世界各国から選抜された高校生を受け入れ、教育を通じてグローバル人材を養成する国際的な民間教育機関(本部 ロンドン)。UWC日本協会は、UWC活動を日本で普及させるため、経団連の全面的支援のもとに設立され、UWCに派遣する高校生の選考や奨学金の支給等を行っている。奨学金は、UWCの趣旨に賛同する経団連主要会員企業等からの寄附金を原資としており、企業の社会貢献活動として、UWC日本協会へのご入会を検討いただきたくお願い申しあげる。

い感覚はなかった。そこは、皆が共有する当たり前や常識が何もない世界だ。眼鏡の存在を初めて知るマラウイ人の学生、元兵士だったというアフガニスタン人の学生、英国の貴族出身の学生など、私が想像だにしなかったバックグラウンドの学生が集まり、私の世界は一夜にして、それまで見聞きしてきたものの何倍にも広がった。同時に自身の無知にも気づかされることとなり、日々大恥をかいたが、UWCコミュニティでは、あらゆる意見や価値観が無条件に受け入れられ、二年間かけてその多様性がお互いの価値形成に役立てられていった。

メディアに影響されない世界

UWCの空間を特異にするもう一つの要素